

## 雨の祈りの争い

### 一

文永八年の三月、桜がちつて、これから鎌倉にとっては、最もよい時候がこようとする時なのに、この年はそうはいかなかった。

一滴の雨もふらずに、三、四、五と三か月すぎてしまったのである。三、四月は、お天気で結構です。よい日が続きますで過したのだが、五月の田植えが近ずいてきたのに雨がふらないは大変である。あるところでは、苗代の水がないという騒ぎがでた所さえあった。陽でりに飢饉なしとはいいが、鎌倉の街はそうはいかなかった。

六月頃になると、呑み水にこと欠くようになってきた。井戸水はそこをついて、塩からなくなってきた、呑み水の用をなさなくなるといふ仕末であった。たよりになるのは、谷のところどころからでておる清水だけということになってしまったのである。朝と晩には、鎌倉中の堀の清水に

人が群集して、のみ水を汲むという騒ぎが起っていた。こうなると、谷毎やうに水を汲む人員をきめて、外の谷の人には水を汲ませないという騒ぎで、ところどころに喧嘩けんかが起きるといふ仕末であつた。

ところが、鎌倉に一か所だけ、喧嘩も起きず、一日中賑やかに水を汲んでおるところがあつた。それは、極楽寺の境内であつた。極楽寺の境内にも出水があつたが、こんこんと良い水がたんと出て、ひでりを知らない程であつた。

極楽寺の所化の秀観は、今朝も早くから、庭掃除に余念のないような恰好である。ときどき山門の方に眼をやつては、箒をつかつている。大勢だつた水汲みの連中が一寸とだえたひと時である。「きた、きた」秀観の好きな女の子が、水を汲みにきたのである。日照りがつづくようになつて、誰だつたか、三、四人の人が水をもらいにきたが、次の日から数えきれない程の人になり、それが四月五月とつづき、六月に入ると、もはや、水をもらう方が当然のように境内に列をつくるようになったのである。ずいぶんと遠方から水をもらいにくる人もあつたが、秀観が「きたきた」と心に叫んだ女の子も、ずいぶん遠方からくるらしいのである。一度どこにすんでおるかきいてみたかつたが、顔を見ると反対に口が動かなくなつて、まだ、どこから、水を汲みにくるのかは知らないのである。

娘は、天秤に水桶をかつぎ、秀観の側を通つて出水の方についてしまった。

「帰りにきいてみよう」

秀観は決心しながら、箒の柄をぐつとにぎりしめて、崖のネムの樹の花をなやましげにみるのだった。

やがて娘は水を汲んで返ってきた。

秀観の前を通る時、一寸会釈をしたので、水が桶からゆすれてこぼれた。

「水がこぼれます」

「大丈夫ですよ。こぼれた方がいいのよ」

「だって、せつかく、汲んだ水でしょう」

秀観が娘にいった。

「また、もらいに来たらいいでしょう。外の谷だと、一日に一度しか汲めないけど、極楽寺の秀観さんは、そんなけちなこといわないわ」

「ええつ、拙僧の名を、なぜ知ってるのだ」

「知ってますとも、御勉強もよく出来ることも、御師匠様から可愛いがられていることもそれからと」

「誰からきいたのだ」

「誰からだっていいでしょう、私はなんでも知ってますよ。そしてねえ、日照りがいつまでも続

けばよいと思ってるのよ」

「驚いたことをいうものだ。鎌倉中の人達が、毎日天を眺めて雨を祈ってるのに」

「雨がふらないから、極楽寺に公然と入ることができるんでしょう。あつ誰か、水もらいにきたわ。また、あした」

次の次の朝、相変わらずうらめしい程に今日も天気がよい。どんな約束が出来たのか、極楽寺の本堂の裏で秀観と女の子が話をしていた。秀観は軒下の小岩に腰掛けて、水汲桶の天秤棒にこれも腰掛けた女の子と話しているのである。

「何時までも、極楽寺に水を汲みにくるわけにはいかないよ」

「どうしてさ、この分じゃまだまだ雨はふりっこないわよ。やっと、思いがかなって、秀観さんと話ができるようになったんだもの。当分雨が降らない方が、私にはいいわ」

「ところが、そうはいかないよ。うちの御上人さまが、雨をふらしちまうから」

「まさか、そんな馬鹿なことが」

「と思うだろう。ところがだ、うちの御上人さまは雨ふらしの専門家だよ」

「本当かしら……」

「本当だとも、嘘なんかいうもんか、もうかれこれ十七、八回ぐらい雨を降らしているんだから、大変なものさ」

「どうしてそんな不思議なことができるのかしら、本当に不思議だわ」

娘が臂をどんとついたので、天秤の両端から水が、ぼしゃんとはね上った。

「ほうら、水がこぼれたよ」

「なにさ、もつたいないが、こんな水、みんなこぼれた方がよいのよ」

「どうしてさ……」

「こぼれたらまた汲むのよ。ねえ、汲んでしまえば用がなくなるのだから、私には桶がいつも空の方がいいの、ゝその方が秀観さんとお話ができるでしょう。ねえつ、ちようど私は日照りがつづけば、続く程いいのと同じよ」

「驚いた娘さんだ。だがね、今日は幾日だったっけ」

「今日とは、昨夜みたお月さんが半分だったから、たしか八日じゃないかしら」

「すると、あんたが、ここに水を汲みにくるのは、あと十日ぐらいしかないな」

「どうしてさっ」

「ほうら、臂を上げると、また水がこぼれるぞ」

「桶が空になった方がいいといったじゃないのよ」

娘は、わざと、うんと臂を上げて、天秤の上にごしんと腰を落としたが、あまりはげしかったので、平均を失って、天秤と共にひっくり返ってしまった。二つの桶の水は一瞬にして乾ききつ

た地面がすってしまった。

「ほうら、お望み通り桶が空になったよ」

「ああ痛かった。ひとがひつくりかえったのに、笑ってるのね。ひどいひと……」

「仏のさばきかもわからんぞ」

「冗談はやめてよ……」

娘は、ぬれた土の上に、気持ちよきそうに足をのばすと、臀をすえてしゃべりだした。

「何故あと十日位しか、ここにこれないというの、本当……」

「十六日から、うちの御上人さまが、いよいよ雨をふらせる御祈禱をするんだよ」

「どい……」

「靈仙が崎の池で……」

「へえつ、本当にふるの……」

「ふるさ、一昨年、うちの御上人が江之島で雨を祈ったが、たちまちふつたのを知らないんだな

あ……」

「知るもんか……」

「極楽寺の出水ばかりありがたがらないで、少しはうちの御上人さまをありがたがらなけりやも  
つたいないよ」

「でも、どうしてそんな不思議なことが出来るんでしょうねえ、不思議ねえ」

「修行の功さ」

「どんな修行をするの」

「いろいろあるさ、そもそも、うちの御上人さま、極楽寺の忍住房良観上人は、寺院を結界すること七十九所、寺の修繕が八十三所、仏塔建立二十、大蔵経をおさめること十四蔵、橋をかけること百八十九所、水田を寄進すること二十二所百八十町、道路の修理七十一所、井戸をほること三十三所、殺生禁断六十三所、浴室、療病所をおくこと五所、仏像を配付すること千三百余、戒経三千三百余巻、布衣を施すこと三万三千反といった徳行の誇れも高く、今鎌倉では地藏尊がカラダ山よりおいでになったのか、迦葉尊者の生れかわりかといわれる程の戒行の高いお方……」

「何がなんか所、どこがなんか所、嘘がなんか所……とはいわないが、どこからそんな莫大なお金ができるのよ。それにしても秀観さんもよく覚えたわ。ここにいる人は、みんなそれを覚えさせられるでしょう」

「そんなことがあるものか」

秀観は怒ったような口調でいうと、

「自分のお師匠さまがえらい人だと思えば、師匠の徳行なぞひとりでおぼえてしまうぞ、つまらんことをいってはならぬ」

「おそれいました」

娘はおどけて、水をすいこんで黒くなったところに、きちんと坐わると、

「では、ついでにおうかがいたしますが、雨をふらせると申しますが、そんな都合のよい御経があるのでしょうか」

「あるぞ」

「えつ、随分もったいぶるわねえ」

「ははは」

秀観も娘も一緒に笑った。

「こんな話なら、誰にきかれても恥ずかしくないから、誰か通ればいいんだがなあ。お経の中に書いてないものはないというが、たしかに雨をふらせる御経がある。大雲輪請雨経というお経がある。これは一百八十五の竜王を呼んで雨をふらせるという御経だ。この請雨経を読んで、一番最初に雨をふらせたのは本朝においては弘法大師だといわれておる。だが、その弘法大師も守敏という坊さんと雨の祈りの競争をした時は負けたと、ものの本に書いてある、元長元年の三月神泉苑において弘法大師が始めに祈ったが、ふったにはふったが洪水になってしまった。そこで守敏という坊さんが、その次に雨を祈ったがこれが、神泉苑の善女竜王のお願いに合ったのか、静かな雨が三か日ふつたとある。ただし修行を二日のばすと書いてある。この功によって守敏という

人は、律師をへないで少僧都の位を天皇よりいただいたとある。まだこの外、伝教大師と護命との雨の祈りの争いなどがあるから昔のえらい坊さんは、雨などはへいちやらにふらせたものと思  
うんだ」

「へええ、坊さんてえらいものねえ。秀観さんもそんなになれるかしら」

「修行次第でなれる、今でもお前の雨ぐらいならすぐふらせてやるぞ」

「私の雨って……」

「眼から出るじゃないか、すぐと」

「まあ馬鹿にしてるわ」

「まあ、そう怒るなよ。その代わりにきけない話をきかせてやるから、実はこれはまだ秘密だが、つい四、五日前に、うちの御上人さまは殿中に呼ばれて、執権職北条時宗さまから直々に祈雨のことを頼まれたのだ。春以来関東一円に雨一滴もふらず、ただただ鎌倉中の人びとのなげきだけではない、もう一刻の猶予もできない、さつそく雨の祈りをせよとのご命令なのだ」

「えらいのねえ、そしてどうなの」

「もちろんさつそくにお受けしたさ。実は雨請いの本当の専門家はわれわれの律宗ではなくて、真言宗が専門なのだ。ところが八幡宮の別当職だった、真言の大修法師隆弁僧正は先年、御執権職時宗さまの奥様が御懐胎の時、たのまれて男を産むように祈ったのだ。むずかしくいうと変成

男子の修法というのだが、それが失敗してしまったのだ。隆弁僧正はそれを恥じたのか、この鎌倉をさって京都にいかれてしまった。それで、今この鎌倉には、うちの良観上人をのぞいては、雨請いの修法の出来る人がいないのだ。うちのお上人は、御師匠さまの叡尊上人より、律宗の祈禱はもちろんのこと、真言宗の修法も習いつたえておるといってお方だから大したものさ。心に任せて、雨をふらせるというのだから」

「おどろきだわ。十六日から靈仙崎で御祈禱が始まったら私もみにいこう」

「みにいくなどと、もつたいない。一緒になつて御念仏でも唱えなさい」

「私達も唱えていいのかしら」

「お経は転読というて初中後教行をよむので、これはしろうとの読めるものではない。御念仏になつたら、一緒に唱えたらよいのだ」

「私も一生懸命唱えるわ」

「恐らく、鎌倉中の人びとが靈仙崎にあつまつて、良観上人とともに念仏を唱えるであろう」

この時本堂の正面の方で

「秀観、秀観……」

と呼ぶ声がきこえた。

「あつ誰か呼んでる。ではまた」

秀観は白衣の裾をはたくと、すつくと立ち上がった。

文永八年六月十八日、極楽寺の良観の雨請いの祈禱が、靈仙崎で行われた。良観の弟子は、二千七百四十余人といわれておるが、この日、これに加わったのは百二十余人である。型のごとく、祭壇をしつらえ、華をそなえ、香をたいて静かに読経を始めたのである。天は、心にくきまでに澄みきって青かった。果たして雨がふるか、鎌倉中の人びとの期待は良観にかかっていた。

二

「これで、日蓮坊も、われらが御師匠さまの良観上人さまの弟子になったも同然だなあ」  
「さようさよう、面白いことになったもんじゃ、鎌倉中の人びとが、そうなったら騒ぐであろう」

良観の弟子の周防房と入沢入道とが、由比が浜を、歩きながらの話である。この二人は、滑川を渡ると、浜にそって長谷の方に向かって歩いて行くのであった。

この三、四か月の日照りにもかかわらず、海水はへることもなく、その青さをますます増し

て、由比が浜の砂地を、けちらしておるのであった。呑み水さへことかくような鎌倉のこの頃では、由比が浜の砂地にたわむれるような、波頭らがうらめしい程であった。

この周防房と入沢入道の二人は、たった今、聖人の松葉谷の庵室からの帰り道であった。

良観が幕命をおびて、靈仙が崎の祈りを始めると、三日目のことである。松葉谷の聖人からと  
いつて使いが、極楽寺にきたのである。

良観の祈雨について、聖人より申し入れたき議があるによつて、お使いのものを松葉谷にさし  
むけてくれとのことであつた。そこで、周防、入沢の二人が、良観の命令によつて、即日、聖人  
の許をたずねて、今はその帰り道なのである。二人とも元氣よく、笑い興じながら浜の砂地を歩  
いていた。

「本当に今日は嬉しい日だなあ」

「そうさ、拙僧も、極楽寺を出る時は、日蓮法師の毒舌をきかねばならんかと、内心ひやひやし  
ていたのだ」

「ところが、松葉谷へいつて、あの高慢ちきな日蓮法師に逢つてみたら、話がてんで違ふんだか  
ら面白いじゃないか」

「だが、雨が本当に降るかしたら、降らないと大変なことになるぞ」

「馬鹿なことをいうな、ふらんでどうする。現に何辺もふつていないじゃないか、一昨年の江の島

の祈雨にだってちゃんと雨がふっているではないか。雨が降らんことがあるものか」

「雨がふればよいが、そうでないと話があべこべになるんだから心配だよ」

「そんな、あやふやな気持でよく坊主になっておれるな。貴方は」

「あつ、煙があがっている」

「盛んにやっておるらしいなあ」

稲村崎の手前の霊仙崎の山の上に煙が立ち上っているのが、由比が浜からはつきりとみえていた。

良観が祈雨の地としてえらんだ場所である。今日は祈雨の日に入って三日目である。そろそろ御祈禱にも、油がのつてきたといえるころである。

「さあ、いそいそ」

「お師匠さまは、霊仙崎の山におるであろうから、坂下からいこう」

「そうしよう」

周防房と入沢入道の二人は、由比が浜辺を通りこすと、漁師部落を通りぬけて、坂下から霊仙崎に登り始めたのである。

風が少しも通らぬ木立の路をうねうねと登ると、視界のひらけた台地に出た。ここは極楽寺の塔中仏法寺の境内である。この境内が、このたび幕命を帯びて、請雨の祈禱をした良観がえらん

だ場所であつた。

御祈禱の場所になつているところには、青い幕が張りめぐらしてあつた。盛んなる読経の音が幕の内から湧き起つていた。

二人は、この幕をちらつとみただけで、その中には入らず小さな本堂の脇の木立の中に入つていった。

木立の日陰に青い法衣を着て、青い敷物をしき、青い曲祿に腰掛けて、青い数珠、青い中啓をもつた良観がいた。

「只今戻りました」

「お使にいつてまいりました」

二人とも一緒に拝礼を良観にした。

細い顔、細い首の良観は、眼を細めて二人にいつた。

「ご苦労ご苦労。して、彼の法師の申入れとはいかなることであつたか」

「それが、お師匠さまおよろこび下さいまし。日蓮坊が、お師匠さまのお弟子になるといので

い致します」

「本当でい致します。日蓮坊が、自分からそう申したのでい致します」

周防、入沢の二人は力をこめていい放つたのである。

「ほう。それは面白い。だが、条件があるであろうなあ」

「はい。条件と申しまして、珍らしいことではありません。お師匠さまの今度の祈雨がかなつて、雨がふつたならば、必ず弟子になるというのでございます」

周防房がいうと、入沢入道も言葉をつづけていった。

「七日の内に一滴の雨でもふつたならば、日蓮坊が常日頃口にいたしております、念仏無間の法門をすてますというのでございます。そして、お師匠さまのお弟子となつて、二百五十戒を保ちますというのでございます」

「お師匠さま、時節到来でございます、日蓮法師を、わが弟子とする時節が参りました。日蓮法師が帰伏しますならば、その弟子達が帰伏するのも当然でございます。日蓮の弟子が帰伏するということになれば、おそらく、日本国中の大半の人びとが、帰伏するでありましょう。どうぞ、お師匠さま、雨を一日でも早くふらせていただきたいと存じます」

良観はますます眼を細めていった。

「それはそれは、近頃にないめでたいことである。愚僧は常日頃から、日本国中の人びとの酒をのむことをやめさせたいと願つておつたが、あの、酒豪家の日蓮法師が、邪魔をするので、これがなかなか出来なかつた。今、鎌倉の戸数は約一万戸といわれるのに、酒壺の数は三万二千二百七十四個あるというようなふしだらさである。天が旱天をもつて、人びとを戒めておるのに、人

は、水の代わりに酒を呑んでふらつくという情けない始末である。こんなことで、なんで、天が人をいつくしむものであろうか。日本国の一切衆生が、不殺不盗不淫等々の八齋戒を保つならば五風七雨、意のままであらう。その邪魔をしておった日蓮法師が、雨がふるならば、わが弟子となると申しおったか」

「はい、たしかに申しました」

「よろしい、日蓮が帰伏する、日蓮が弟子になると申したか、祈りの半ばは達せられたようなものじゃ。さあ、導師に申し伝えよ。この良観が、再び導師となうて読経すると、いいかな」

従者は立ち上がると、青い幕内をめざして、駆けるようにして走りさった。

靈仙崎の良観の請雨の祈禱所は、読誦するところの大雲輪請雨経の祈雨壇法にのつとつて、式場はこしらえられていた。

祈雨の方法は、屋外に壇をつくって、一切の不淨物をさつて、青い幕をはり青い旗をたてなければならぬ。壇の一方には、先ず大きな軸をかける。その軸には、極樂の宝水池の絵がかいてある。池の中には、海竜王宮をえがいて、竜宮の中では、お釈迦さまが説法をしておる姿がかかれていて、右には観自在菩薩、左には金剛手菩薩がはべっている。お釈迦さまの前には、三千大千世界主のリンガイ竜王がその眷属をひきつれてならぶが、ぼおとした青黒い雲を身にまとい、半身以下は竜身で宝水池の中にあるが、上半身は竜形を出した菩薩の形をして、池から身体

を出して、みんなお釈迦さまを拜んでいる姿になっている。

さて壇の四角には、清水をいれた瓶を一つ一つおく。お供物はすべて、青一色でなければならぬ。飲食菓子等に、青いものがない時は、青い色で塗れと経文にある。御供物ばかりではない。この式場でつかう道具全部が全部青色でなければならぬ。従って、列座の僧侶は全部新しい青い法衣をつけて、青い敷物の上にすわって読経するのである。もちろん、頭もそりたてのままのおであるが、経文にはそこまでは書いてない。僧侶は厳重な戒律を守ることはもちろんで、俗人が僧侶に加わって一緒にやろうとするならば八斎戒を必ずうけなければならぬ。祈禱中は食物にも制限があつて、必ず三白食でなければならない。

三白食というのは、印度では、乳と酪と飯との三つの白い食物をいうのだが、日本では、乳や酪はやらないから、これに代つて、白湯と大根と白飯をたべるのを三白食という。支那では蘇東坡が、貢父に三白食だといつて、一つまみの塩と一皿の大根と一椀の飯をくわしたが、次の日蘇東坡は、貢父に、昼食をなんにも出さず、塩もない、大根もない、飯もないから、糞・飯だといつた話がある、毛は無いの意だそうである。

たべものは二、三百人になつても、三白食なら簡単であるが、毎日入浴をして身を浄め青い法衣を身にまとうとあるから、この経文のごとくやったとするならば、雨の祈りも大變に出費のかかるものである。であるから、良観の祈雨も、幕府の命令であればこそ、費用も幕府から出るか

ら、雨の祈りも出来るのであって、到底個人では経文にのせる式法通りの祈雨などは費用がかかるので出来るものではない。

壇上には大雲経を安置して、西面して僧侶は大雲経を読むのだがお経は交代して読み、経の声はたえてはならないというから、七日間昼夜に読まねばならないのだから大変である。人数については経文では二人三人あるいは七人が父代でよむとあるから、良観上人の最初の七日間の祈雨は百二十人とあるから、これが適当に交代してよんだのである。大雪経の内容というのは、百七十人の竜王の名前と、呪文の句すなわちダラニで出来てお経で、このお経を読むと、沢山の竜王が諸々の苦をはなれて無上菩提心を起し、歓喜して雨をふらせるといのである。だいたい一日二日から七日に渡ってこの大雲経をよめば雨がふる。ただし、七日でふらなければ、また七日つづけるというのである。大雲経といって、どの寺にもすぐあるというものでないから、人数だけ、経典をそろえようと思えば、無論写経をするのだから、請雨の祈禱と一口にいったつて出費はなかなか大変なわけである。

さて良観が雨のいのりをはじめてから、五日目のことである。聖人から、痛烈な催促状がきた。その手紙を要釈すると、次のようなものであった。

「今度、日蓮が、貴僧に対して、雨のいのりを申し入れたが、これは日蓮が法門の邪正を、すべ

ての人に実例をもつて示そうと思つてやつたことである。雨の祈りをもつて、法の勝負を決したことは昔からあることで、護命と伝教大師、守敏と弘法との例がある。よつて、貴僧が、雨をふらせたならば、日蓮は念仏無間地獄の法門を即座にやめて二百五十戒を保とう。ところが、祈雨をはじめてから、本日で五日目となつたが、まだ一滴の雨もふらないがこれはどうしたことであるか、貴僧の念仏真言の宗がすぐれておるならば、もう雨がふつてもよさそうなのである。好色家で名の通つた和泉式部は、「ことわりや日の本なればりもせめ。さりとはまた天の下には」という和歌を読んで雨をふらせ、能因法師は「天の河苗代水にせきくだせ、天くだります神ならば神」と三島神社に歌を献じて、「雨をふらせたことは、貴僧も充分承知であらう。貴僧は、今鎌倉では地藏菩薩の生れかわりか、迦葉尊者の再来かといわれている戒行の誇れ高い方である。祈雨五日にして、一滴の雨もふらないとは不思議である。いそぎ、雨をふらせて、民のなげきを救わせ給え」云々とあつた。

### 三

文永八年六月二十四日の夕刻がついにきてしまった。

良観上人祈雨七日の夕刻である。聖人に約束した期限がきてしまった。夏の陽は鎌倉山にはい

り、風は死んで立木の葉は少しも動かない。霊仙崎の祈雨の場所では、青い幔幕もくたびれたように動かず、青い幟は暮れて行く空に、まったく無表情につたつていた。

幕の中の説経だけは、依然として威勢がよかつた。

だが、雨がふらないのである。一と七日の約束だから、正確にいうと、まだ五、六時間はあるが、その間にふりそうな空模様ではない。一番星が赤々とみえ始め、あたりが暗くなるにつれて、星の数は増して行くばかりである。

あたりが、次第に暗くなるのも忘れて、祈雨の壇場に程近い木立の中で、評定がつづいていた。それは、この調子では、どうしても雨がぶりそうもないから、あと一週間のぼしてもらうということになったのだが、その延長の使者を何時だすかということが問題なのである。使者を出した後で、一天にわかにかき曇つて、雨でもふりだせば、雨がふつてもあまり自慢にならないから、ふらんときまつたところで、使者を出そうというのである。ところが、四、五時間で約束の時間がきれるのだから、今、使者を出さないと、負けたということに決定してしまうかも知れない。だから、使者の時刻をいつにするかということ、交代の祈雨僧連中が責任のない評定をつづけていたのである。

「見給え。あんなに、星が出はじめてしまった。これでは、いくらお経をあげても雨がふる筈がない」

「常識はこまる。今夜が満願の夕なのだから、願いが成就する時は、星がでていようが、それこそ太陽が照つていようが、一天にわかにかきくもりだ」

「それは、わかる。だが、あと四時間ぐらいしかないではないか。一天にわかにかきくもる場合には、風がもうそろそろ吹いていていい筈なのに、そよとも、風がふかないではないか。これをどう解釈するのか」

「嵐の前の静けさだ。雨の夜にも星という諺があるではないか。貴僧は知らんのか」

「知らんとはなんだ、人を馬鹿にして。その諺はだ。雨夜の月、網の目に風とまるのたぐいで、ありえないと思うことでも、まれにあるということだ」

「だからいいじゃないか。貴公のいう通り、ありえないと思うことでも、まれにはあるということなのだ。貴僧こそ、論語よみの論語知らずだ」

「その諺を今引用するのはおかしい。それはだなあ、今考えてみると……」

「おいおい、くだらん論をするな。良観上人さまから断が出たぞ。周防房と入沢入道の御両師が、残念ながら、松葉谷に、速刻、あと一と七日の延期を、日蓮坊に申しこむことになったのだ」

「残念だが、仕方がない」

「後の一と七日では必ずふらせてみせるぞ」

「ナンマイダ、ナンマイダ」

本立の中の祈雨の交代僧は、論をやめて、星あかりに互いの顔を見合わせるのだった。

松葉谷の聖人の前に、周防房と入沢入道が対座しておつた。

「あと一と七日延長という良観殿の申し入れを、日蓮たしかに承知いたしました」

「では、ご承知下さいますか。まことにありがとうございました。さつそく帰りまして申し伝えます」

二人は板の間に、額をこすりつける程に平身低頭して、立ちあがろうとした時である。

「まあ、待ちなさい。何故、雨がふらないかということ、日蓮がご兩人にお話しいたそう。祈雨の延長を承知しておきながら、何故雨がふらないかをきかせないでは、慈悲がないと思うので、お話し申そう」

当惑したような様子が二人の顔にみえたが、こぼむことも出来ず、二人は坐りなおすのであつた。

「だいたい、祈雨の争いというのならば、雨がふって、いかる雨がふつたかということ争うのが、祈雨の争いである。祈雨しても、雨がふらないのでは、争いの中に入らないと思わねばならない。雨がふつたところで、雨の姿をみて、祈る者の賢不賢を知るといのが、本当の雨の祈

りの争いである。雨には、天雨、竜雨、修羅雨、粗雨、甘雨等々の種類があるが、良観殿のは一と七日たつても、一滴の雨もふらないのであるから、誤つても、日蓮と雨の祈りの争いをしたと申してはなりませんぞ。後世を誤まらしめるものです。日蓮は良観殿とは、雨の祈りの争いをしてはおらんだ。一滴でも雨がふつたら、日蓮と雨の祈りの争いをしたと申しなさい。後七日祈雨の日延をなされたから、その間に雨がふつたら、日蓮と雨の祈りを争つたと申してもよからう。昔弘法大師は、雨を祈つたが、二た七日の間一滴もふらなかったことがある。その砌り、天皇が民の歎きをうれいて、雨を祈つて、雨がふつたので、その雨を弘法大師は、自分のふらせた雨だといつわつたことがある。真言の善無畏三蔵、金剛智三蔵、不空三蔵の祈雨の時は、小雨はふつたが、大風が連々とふきまくつたので、勅使をつけて三人とも追放となつた話があるが、お二人とも、同じ真言ならばこれらのことは充分ご承知の筈である。

天台大師は陳の世に日照りが続いた時に、法華経を読んでたちまちに雨がぶり、王臣頭をかたむけ、万民は合掌して礼拝したという。この時の雨は、大雨にもあらず、風も吹かずの甘雨であつたので、陳王は大師の御前にあつて、内裏に帰えることを忘れ、三度礼拝したと伝えられておる。日本においては伝教大師は、嵯峨天皇の御代の弘仁九年の春に、法華経、金光明経、仁王経をもつて、祈雨をされたが、三日目にほそい雲が出て、ほそい雨がしづしづとふり始めたので、天皇は大変に喜ばれて、諸宗が反対していた、大乘の戒壇を叡山に建立することを許されたと伝

えられておる。

さて良観殿は一と七日の満願になつても、未だ一滴の雨もふらないのはいかなる理由であろうか。これから申すことは、決して、日蓮が申すのではない。釈尊のお言葉を伝える。即ち経文の通りを申すのであるから、決して立腹されてはいかんぞ。起世経という経文には「諸々の衆生ありて放逸をなし、清浄の行を汚す、故に天雨をふらさず」とある、また「不如法なるあり、樞貧嫉妬邪見顛倒せる故に、天則ち雨をふらさず」とある。経律異相には「五事あつて雨なしとある。五事とは、一には風起りて吹く、二には火起りてこがす、三にはアシユラ手をとつて海に入る、四には雨師淫乱、五には国王理治せず、雨師怒かる故に雨ふらず」とある。よくよくと、この経文を良観殿にお伝え下さい。」

聖人は周防房と入沢入道を見おろしたが、きいておる兩人の姿は、獅子王の前の小鼠のように哀れであつた。さあつと音がしたので、兩人ともあわてて、雨かと思つて庭をみたが、それは松葉谷の松籟の音で、空には二十四日の月がのぼる程に、夕はふけていたのである。

後の一と七日の延長に、良観上人の祈雨は緊張した。多宝寺からも数百人の僧侶を呼んで応援させるといふ始末で、たく香の煙りは天をこがし、誑経の声は、由比が浜の波の音をも消すとい

う始末であった。だが、後の七日のうち二、三日すぎても一滴の雨もふらなかつた。さあ、こうなつてくると大騒動である。ついに、念仏の門徒が、騒ぎ出してしまった。雨さえふれば、あの日蓮坊が南無妙法蓮華経をすてて、南無阿弥陀仏を唱えようと、良観に約束したそうである。これはどうでも、念仏門徒が協力一致して、坊さんを助けなければならぬ。良観や坊さんばかりに任せておいては、雨がふるものか。第一坊さんは、三白食とかいって、きりぼしと塩とおかゆ腹で経を読んでいなさるそうだが、そんなすき腹で、お経の声が天までとどくわけがない。坊さんは坊さんの方の修行で雨をふらせればよい。こっちはこっちの力で一つ雨をふらせてみようじゃないか。どの道、雨さえふれば、あの高慢な日蓮坊主をやっつけることが出来るのだ。さあ、南無阿弥陀仏を唱えるものなら、誰でもよろしい。みんな靈仙が崎の山にあつまれと、鎌倉中にふれまわつたのである。ただし手ぶらで集まつてはならない。鍋でも釜でも、鋤でも鍬でもなんでもよい。音のするものをもつてこい。それを叩いてナンマイダを唱えよというのである。

これも生地蔵様と噂される良観の徳であろうか、あるいはまた、ここまできたら、良観だけには任せておけない、自分達の信心で、雨をふらせてみようというのか、いずれかはわからないが、あつまつたあつまつた。靈仙が崎の一山中チンチンカンカン、チンチンカンカン、ナンマイダ、ナンマイダ、の大騒ぎとなつたのである。祈雨の壇場に近よるなどは思いもよらぬことで、木立と木立の間、藪と藪との間には、鍋を釜を、鐘を半鐘を、およそ、音のするものはすべて動員さ

れて一日一晚中たたきどうしである。

こうなつてくると興奮の度合は、日照りつづきの日光にてらされて、やがて異常状態となり、そこらここらに、焦燥のあまりに身をふるわせていたのが、少しづつ動き出して、ついに踊りに発展して、やがてそれは、それなりのリズムに合わせて、狂的な舞踏となつてゆくのだつた。あつちの木立、こつちの山路で、踊り狂つてナンマイダを唱えるのが普通の状態で、座つて唱えておるのは、それのくたびれた奴ということにまで発展してしまつた。近頃流行のバレエというものは、もともと雨請いと狩猟からきたといわれるが、もつともなこととうなずけるのであつた。

ところが、この念仏の狂的な踊りも二日とは続かなかつた。雨はふらなかつたが、風がふきまわつたのである。俗に八風ということをいうが、その種類には詳細にいうと三十二風あるのだが、善風は一向に吹かず、炎風、寒風、凄風、巨風、醜風、滔風、厲風、広漠風などの悪風の八風がふきすさんだので、後の七日の六日目には祈雨壇場には、幔幕ものぼりも、御供物も、あとかたもなくふつとんで、広漠たる姿となり、祈雨の僧侶たちは、山の木立につかまつていなければ、立つておることが出来ないという始末で、その僧侶だけでも五、六百人はいたが、みんな袈裟は飛び法衣は破れ、白衣もふつとんで、坊主頭は、木立の枝が飛びちつてくるので、頭をきられて血はながれる。手をはなせば風にふつとばされるといふ始末で、坊主が地獄にゆけばこの位

の待遇をされるのではないかと思われる程であった。この時分には俗家の応援者は、踊りくたびれて役にたたず、やっとこさつとこ、大風にふかれながら、木の葉のように、自分の家に帰るのが勢一杯というところであった。

良観の祈雨は後の七日の満願の日をまたず、ついに続行不能になつてしまつたのである。

聖人は、民の歎きを患い、日朗、日興等の弟子をつれて、七里が浜に近い田辺の池にゆかれた。この池は、七里が浜が隆起した時に池になつたのであろうと思われる地形である。行合川のながれ出る口をのぞけば三方は山にかこまれていて、昔は立派な入江であつたのが、後に池になつたと思われる。

「日朗さま。私は、今よいことをしましたよ」

「なんですか、日興殿」

聖人のお伴の一行におくれて歩いていた日興が、日朗に声をかけたのである。

「おくれてくる途中で、蛙を助けたのですよ」

「ええつ、蛙を。どうして……」

「蛇が蛙をのもうとしていたのですが、蛙の尻の辺が、蛇の口より大きかつたとみえて、なかなか

かのみこめないでいたんです。蛇のみこもうとして、ぐるぐるとのびたまままで体をまわしながらあせていました。そこに、私が、通りかかったのです。蛙の目が、助けてくれといったような様子にみえたのです。私が蛇をつかむと、蛇は、身体がまわらなくなったのと、私の足音をきいたとみえて、さっと逃げてゆきました。私は、蛙を池にほうりこんでやりました。なんだか、大変よいことをしたような気持ちになったのです」

「そうですか、それはよかったです。もしかしたら、その蛙はこの池の主かもわからない、雨はきつとふるでしょう。日興殿」二人ともはあはあと、笑うのであった。

池の中央に、岬のように突き出た岸辺がある。

聖人はそこに座を占められると、静かに読経をされた。聖人の前にあるのは、簡素な三具足だけであった。さしも大きな池も、うち続く大旱魃に、鍋底にたまった水のようにひあがつてみにくく岸の泥がかたまっていた。二刻もすると、池の面が動きはじめた。雨が滴々とおちて、ちりめんじわのような小波がたち始め、静かに静かに、絹の糸のような雨がふりはじめたのである。

聖人の法力は、良観より勝ること、南無妙法蓮華経が南無阿弥陀仏に勝ることを、天は証明してくれたのであるが、この雨が、やがて、聖人を竜の口の難に追いこんだ雨ともなったのであった。